

世界史教育における異文化理解に関する一考察

～ 「十字軍」を教材として ～

府川 高大*

1. はじめに

わが国における国際理解教育あるいは異文化理解教育の誘発の要因は、一つに近年の国内外での日本人の他国民・他文化との接触の機会の増大、つまり日常の中における「外国」を感じることのできる環境の増大が考えられる。また他方では、国際化時代と言われる今日において、現実的かつ多様で困難な課題が存在し、日本人としてそれら諸問題への立場を明確にする必要性が迫られてきたということであろう。ユネスコ憲章前文にも「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり…」と述べられているように、異文化への認識と理解の態度を養うことは、現代の国際社会の状況を鑑みるに必要不可欠なことである。

しかしながら、日本のような単一民族国家に近い国情、地理的特殊性においては、ともすれば異文化の存在を忘れがちである。我々日本人は、世界の大多数の国々が抱える各種各様の国家体質とそれに伴う様々な考え方が、無数の民族とその文化の存在に由来していることを認識する必要がある⁽¹⁾。そして、それら各民族固有の文化を理解するよう努めねばならない。そのためにも、我々は「ヨーロッパ⁽²⁾の歴史の本質」を見直さなければならないであろう。なぜならば、現代社会の様々な軋轢の主要因として、ヨーロッパ文明の有するある種の非寛容性・排他性を取り上げずにはいられないからである。それらは、ヨーロッパ文明が歩んだ歴史の中で培われて来たものである。「ヨーロッパの歴史の本質を見直す」とは、そうした異文化不理解のモデルについて考察していくことであるとともに、異文化理解の視点を模索することに繋がると考えるのである。

2. 異文化を理解するとは

(1) 「認識」と「理解」

「理解」とは、言葉（思考）の枠には収まらない、より感覚的・自然発生的な感性に他ならない。すなわち、「異文化を理解する」と言葉にすることは容易だが、実際に「理解する」ということほど困難なことではないのではなかろうか。

文化とは究極的に言って人間の数だけ存在すると考えられる。一人の人間の価値観は、それだけで一つの文化を構成すると考えるならば、最小単位の相互理解（異文化理解）は個人対個人の関係であると言える。確かに、個人対個人の接触における相互理解の可能性は高いに違いない。しかしながら、その接触は「友好」という概念に落ち着くことが十分想定出来る。この「友好」という概念は、時に「理解」の有無に拘らず、同一化あるいは感情移入という主観性の高い概念により成り立つと考えられる。すなわち「友好」的理解⁽³⁾とは、「理解」の域に到達する過程

* 筑波大学大学院 聴講生

での一つの段階にすぎず、ゆえに個人間におけるその可能性は絶対的なものとはならないであろう。ましてや、複数個の個人レベルの絡み（集団の形成）、あるいは集団対集団の接触においては相互理解の可能性はより困難となるであろう。なぜなら、個人個人での微妙な価値観の相違や利害関係の存在は、集団の形成・維持において負の条件と成り得るからである。もっとも、対立の状態のなかにも「理解」の可能性は存在すると考えられるため、理解・不理解といった単純な構図で説明することは困難なことである。要するに、「異文化理解」が個人の尊重なくしては不可能である一方で、偏見や誤解、利害関係による争いも必ずと言って良いほど生じることを前提としておく必要があるということである。その上で、異文化理解を語り、国際理解・国際協調という視点を設定することが肝要となるであろう。

ところで、異文化を理解するその第一歩は、間違いなくそれを「認識」することに違いない。なぜなら、「異文化理解」を達成しようとする過程において、ある文化の価値を論ずることなど全く無意味なことであると判断出来るからである。ゆえに、異文化理解は認識論によって語られるべきである。そして、異文化を「認識」するということは、諸文化の価値観を知ること（諸文化の多様性の認識）であり、それは相対的に諸文化を把握しようとする試み（諸文化の価値観を認容すること＝等価値的認識）において普遍的理解へと変容する可能性を有している。さらに、より高次のしかも人類全体に通ずる普遍的理解を目標とするためには、より客観的な視点に立つ「異文化認識」を構築しなければならない。そのためにも、我々は先ず汎民族主義からの脱却を図ると同時に、自文化の再認識を行なうことが必要となるであろう。

しかしながら、国際間における交流の質的・量的な増加は、「現代」を流動的な社会へと変化させておき、異国・異文化について知っていた（理解していた）つもりが、表面的な知識（基本的な空間的認識⁽⁴⁾）すらままならない現状が存在する。まさに異文化を理解することは難しいことであると「認識」させられる。「現代」のそうした諸問題は過去からの積み重ねによるものであり、未来においてもまたそうである。個々の文明に対する認識だけでなしに、諸文明間の過去からの因果関係を解明しようとするのが一つのアプローチになるのではないだろうか。世界の各地域の様々な歴史舞台上で活躍し、相互に交渉・関連を持って生きてきた人々の歴史に関心を抱き理解しようとする態度を是非とも養わなければならないであろう。

(2)異文化の時空的把握

そもそも、ユネスコの言う「異文化理解教育」の観念は歴史的認識（時間的把握）が希薄である。現代の諸問題への対応も、現代という同時代における国際間の軋轢として捉える要素が濃いと言える。実際、現在行なわれている異文化理解に関する教育にしても、その大半が言語教育すなわちコミュニケーション・レベルでの認識・理解を目指している。確かに、異文化理解教育を果たす上で共通言語の習得は一つの大きな目標である。すなわち、共通の言語を話すという共感性は、共通の価値観の構築に繋がると考えてよい。こうしたレベルでの認識・理解もまた一つの異文化理解の達成であるに違いないからである。しかしながら、より普遍性（認識の深まり）を求めるならば、歴史的認識及び空間的認識を総合的に深めていく努力が必要不可欠となるであろう。

歴史教育においては主に歴史的認識を深める学習が行なわれているが、それは本来、空間的広がりをもっている。異文化理解の視点における歴史認識とは、人間が誰しも限りある時間の中に生きていることの認識、すなわち過去からの時間の堆積により成り立つ自己（歴史）を知覚すること（歴史の中の存在としての“個”の知覚）である。そして、そこには人間が相互依存的に生活を営んでいるという認識（空間的な相互依存関係の知覚）が発生するはずである。この概念が、こうした個々人の関係という特殊例から、より広範囲・世界史的視野へと転化していくことが強く望まれる。これを異文化の「時空的把握」と定義する。つまりこの意味するところは、異文化の存在を単なる同時代での異地域との諸関係で捉えるのではなく、異時代における異地域との関連で捉えるということである。具体的に言えば、諸地域・諸民族がそれぞれ対等であり、それぞれの長い歴史の中で、言語や生活習慣はもとより社会体制・政治組織・イデオロギーなど独自の文化を重層的かつ融合的に作り上げてきたのだという、そうした多様性を認識しようとするのである。そして、どの時代においても空間の枠を越えた人間相互の依存関係が存在し、さらにはそうした相互依存関係は時間の枠を越えて常に存在していることの認識（「相互依存関係の時空的把握」）が可能になるならば、地球レベルでの「未来指向」という究極的な目標に近づくことが出来るであろうと考えられる。

そもそも、本来的に歴史学は未来指向の学問である。しかし、実際の研究方法は逆向きにならざるを得ない。それを正の方向（未来）に活用していくのが歴史教育の役割となるはずである。すなわち歴史学においては、歴史事象の根源的理解のために異文化理解の視点が導入されていくであろう⁽⁵⁾。そして歴史教育においては、異文化理解のために歴史事象の根源的な研究成果を活用していかねばならない。そこで、世界史教育の実践における課題として、「ヨーロッパの歴史をその本質から見直す」こと、「文明の遭遇現象を重視する」こと、そして「現代の状況に関わる問題意識を持つ」ことの三点に注目したいと考える。

3. 世界史教育における異文化理解の視点

(1)「ヨーロッパの歴史をその本質から見直す」こと

ヨーロッパ文明は、その初期において、同時代の地中海文明（ビザンツ文明・イスラム文明）に比して明らかに文明レベルにおいて格段の見劣りがあった。それにも拘らず、その後のヨーロッパの歴史的展開には目を見張るべきものがある。ヨーロッパ文明の発祥地である西ヨーロッパは、地理的に言ってユーラシア大陸の西北端に位置する小さな地域に過ぎず、他の豊かなユーラシアの諸地域と比してあらゆる諸条件に関して劣っている（いわば辺境地域と呼べる）と考えざるを得ない。

しかしながら、かくのごときヨーロッパ文明が、なぜ近代国家のモデルとなるような組織を作り出したのか、世界の富を支配し文化をリード出来たのかは全く謎であると言っても良いであろう。このことは、裏を返せば、近代の資本主義社会を生み出したのが紛れもなくヨーロッパであり、近代以降、世界の諸地域・諸民族が従属的な状態に置かれるという状況を構築したのもヨーロッパであるということである。その過程においてヨーロッパは、自らの文明と価値観の正当化を図り、それを当然とする思考方法や歴史認識をも発生させたと考えられる。日本もまた、明治

維新以後のいわゆる「近代国家」としての成長の中で「進んだヨーロッパ」に追い付こうとする思想を作り出している。このことは、日本人のアジア認識の形成にも大きく影響していると考えられる。すなわち「ヨーロッパ中心史観」の克服は単なる教科書記述上の問題だけではなく、世界史教育の内容に関する質的な面において異文化理解の視点と全く不可分ではない。これを克服することは、ヨーロッパの歴史を削減して他地域の歴史をより多く教えるといった方法では必ずしも達成されないであろう。実際問題として、現代世界におけるヨーロッパ文明の圧倒的な影響力を無視することなど到底不可能であり、ヨーロッパの歴史あるいはそこから産み出された価値観を一方向的に否定することも何ら積極的な意味を持たない。また、ヨーロッパ史研究の豊富さ・多様さは、その中に歴史教育の教材としての適切な素材が数多く存在していることも示唆している⁽⁶⁾。現代世界の諸地域を文化レベルで捉えようとするならば、各文化・文明に固有な宗教やそれに基づく価値観を知ると同時に、前述のような理由から、ヨーロッパ的な価値観や制度に対してより深い認識が必要であることを感じずにはいられない。

(2)「文明の遭遇現象を重視する」こと

人間の歴史は異文化接触の連続であったと言っても過言ではない。異文化の接触とは、すなわち異なる文化間の接触であり、広義に把握するなら、国家間・文明間から個人間に至までの全てのレベルでの文化摩擦を総括していると考えられる。文化摩擦はまさに人間が引き起こす問題である。A・J・トインビーは、かつて「同時代文明の遭遇の連鎖」においてその過程にて生じる「応戦の多様性」⁽⁷⁾について論じている。その応戦は、平和的に解決されるものと激しい争いへと移行していくものと大きく分類することが可能である。どちらの場合においても、互いに刺激しあった文化・文明にはその変容を確認することが出来ると考える。すなわち、世界の歴史は、個々の地域に独立した歴史の集合体ではなく、個々の文化（文明）間の無数の接触（遭遇現象）によって寄り合わされた複合体であると考えられる。

そもそも歴史教育では「戦争」の歴史を避けては通れない事実が存在する。これを教える際、「戦争はいけない」的な感傷だけでは終わらない何かを伝えなければならない。被害者の視点からその痛みを共感させることはもちろん重要なことではあるが、加害者の視点（なぜ戦争を起こしたのか）に加え、戦争がなぜ起きてしまったのかを本質的に探ろうとする努力、そしてその結果について分析することもまた不可能ではない。人間の歴史において、戦争もまた人間相互の付き合い方の一種であったと言うことも出来るが、文明の遭遇が争いのみであるといった印象を与えてはならないことは当然考慮すべき点である。そのためにも、事件史に偏るのではなく社会変化の歴史を重視していく必要がある。人間の獲得した文化に息づく「心性」は、時代を経てもその根底を大きく変容させることはないであろう。すなわち、様々な民族がそれぞれの地域において歴史的に形成してきた文化について、それが最も反映される社会生活あるいは思想・思考の変遷を学ぶとともに、その広がりや文明の交流という視点で捉えようということである。なかでも「文明間の遭遇現象」において摩擦の原因となっている宗教の存在は見逃せない。ある文化・文明特有の伝統文化の大半が宗教の影響を受けている。ゆえに異文化の理解のためには言うまでもなく宗教への理解⁽⁸⁾が不可欠となる。異文化を根源的に理解していくためにも、「歴史」とし

て記録に残る事象だけではなく、こうした「深層の心性」⁽⁹⁾に着目していくべきであろう。

(3)「現代の状況に関わる問題意識を持つ」こと

異文化の「時空的把握」の上に成り立つ歴史教育における目標の達成は、歴史を学ぶ学習者が「現代の状況に関わる問題意識」を持てるかどうかにかかっている。通常、歴史を学びたいという欲求は、懐古趣味あるいは好事家的関心に依るところが大きいと考えられる。その中核となる欲求を失わせることなく、いかに理想化するか(問題意識を喚起するか)、その方法を模索していくことが歴史教育の命題となるであろう。そのための手段の一例として、前述の二項目を提示してみた。すなわち、ヨーロッパの関与する歴史は、そこに数多くの異文化接触のモデルを内在しているだけでなく、そのモデルとなる諸問題のほとんど全てが現代との関わりを持つという点において二重の重要性を持っている。こうしたヨーロッパの一連の拡張の歴史において果たした異文化・異文明との遭遇は、我々に異質な文化に対する理解の難しさを改めて感じさせると同時に、我々が常に異文化・異文明に対する「無知的状況」に陥る可能性を十分保持していることへの警鐘でもあると考えられる。この「無知的状況」とは、表面的な知識の欠如という意味だけではなく、異質な文化の深層に関して我々がそれを知ることが困難な状況あるいは知ろうとしない状況を指している。このような状況においては、異文化理解など到底不可能な話である。そうした「無知的状況」のモデルとしてのヨーロッパの一連の拡張を根源的に考察していくことこそ、異文化不理解のモデルから逆説的に異文化理解を考える視点を導き出せるのではなかろうか。

しかしながら、異文化理解の基本的な姿勢となるのは、諸地域・諸文明の社会について認識することであるから、異文化に対する基本的な認識を育てることを前提に、前述の三項目の課題をバランス良く加味させ、最適の場面で的確な問題提起が扱えるような教材構成が是非とも必要となる。そのための一試案として、一連の「十字軍」問題について考察してみたい。

4. 異文化理解の視点からみる「十字軍」

(1)地中海世界における「十字軍」運動の展開

一般に解釈される「十字軍」発生の諸原因は、ヨーロッパ側からの視点に偏ってはいるものの政治・経済・宗教的要因に大別される。この時「十字軍」という事件は、その軍事遠征としての性格が強調されるとともに、ヨーロッパ世界への上記三点への多大な影響が誇張されている。しかしながら、この「十字軍」という事件は地中海世界⁽¹⁰⁾全域において「十字軍」という意識の下に展開された一種の社会運動であったと考えたい。すなわち、本来「十字軍」とはシリア・パレスティナ方面へ向けてヨーロッパ側が送り込んだ軍事的遠征(「十字軍」遠征)であると考えられる。そして11~13世紀にかけて全ヨーロッパの各方面で盛んに展開された異教徒・異端などヨーロッパ=キリスト教会に不利益を与える(敵対する)ものへの一連の攻撃的働きかけを「十字軍」運動と定義出来るのではなかろうか。

「十字軍」運動の発生以前のヨーロッパは、地中海世界の一部に属してはいたものの、主体的にその表舞台に登場することはなかったと言えるであろう。この「十字軍」の時代にヨーロッパは、地中海第三の文明として登場したが、このことはそれ以前の「ビザンツとイスラム」という

比較的安定した二大勢力の均衡状態を破ったとも考えられる。この「十字軍」運動という「文明の遭遇現象」は、各方面での変革の“きっかけ”となっていたと考える。例えば、この潮流において一番割りを食ったのはビザンツ世界であった。コンスタンティノープルの陥落（1404年）は元より、ビザンツ帝国はその滅亡までヨーロッパへのイスラムの反撃の身代わりとなっていたように思われる。また、イスラム世界の「十字軍」時代の勝利はうわべだけのものでしかないという評価も存在する⁽¹¹⁾。「十字軍」によってイスラム特にアラブ世界に刻まれた傷跡は深く、現代においても一種の迫害感情を引きずっているという。もちろんヨーロッパ世界においては、まさしく「十字軍」はその社会的変革の象徴であった。彼らは、「十字軍」運動を通じその文明レベルを飛躍的に促進させただけでなく、異文明との接触を通じて自己の文明を認識・自覚することとなった。

しかしながら、この「十字軍」時代における諸文明の遭遇は、他文明を認識・理解することに関してはあまり良い結果とはならなかった。最大の焦点は、前述のヨーロッパの自己認識にある。W. M. ワットや三木亘氏は、「その自己認識の本性はイスラムへの対抗意識であり、それもまたイスラム文明へのある種の劣等感（complex）あるいは被害者妄想意識である」とすら分析している⁽¹²⁾。要するに、ヨーロッパ人の持つある種の非寛容性・排他性などと呼ばれるものが、おそらくはこの「十字軍」時代にその歴史的環境の中で形成されたと推測出来ることに着目しなければならない。

(2) 「十字軍」運動の本質的精神

「十字軍」が「聖戦」であるという論理は長い間受け入れられてきた。そのイメージは戦争としてのそれを超越している観すらある。例えば、「十字軍」という言葉は“改革運動”あるいは“撲滅運動”といった良いイメージで使用されることが多い。長年の研究成果により、我々は、「十字軍」の歴史がけって「聖」なるものではないことを理解できるようになったが、未だ道義的批判の域を脱しきれていないと感じる。なぜ「十字軍」遠征が聖戦と呼ばれたのか、そこにこそ「十字軍」運動の本質的精神が存在すると考えられる。

「十字軍」運動の本質的精神は、聖戦思想と巡礼精神に由来していると推測出来る。キリスト教は本来“平和”の宗教である。イエスの思想には戦いの精神は含まれていないはずである。ところが、キリスト教会は、絶対的な無抵抗主義を脱ぎ捨て、戦争の正義性について論じ始めることになったのである。すなわち「正義のための戦争」の論理に始まり、「教会の利益のための戦い」へ、そして神に祝福された「聖なる戦い」という論理へと発展する。一方、キリスト教徒の巡礼行には「キリストの苦難の追体験」という宗教的意味合いが含まれていた。教会側は巧みにこの巡礼精神（殉教精神）を「聖なる戦い」の論理に組み込み、そこに「異教徒と戦うことは巡礼同様の功德をもたらす」という定義とともに戦士に対する特別な罪障消滅の約束が加味されることとなった。すなわち、「十字軍」という聖戦においては、死んでいく者には永遠の生命が、生者には栄光が与えられることが教会の名の下に約束されるようになったという。

こうして「十字軍」運動は、矛盾を抱えながらもその精神を後々まで引き継いで広範に展開した。例えば、R. W. サザーンの論じるように、「十字軍」時代前におけるヨーロッパ人の無知的状

況が「閉ざされた空間に閉じこめられた無知」であったのに対し、「十字軍」時代以後におけるその状況は「勝利が産んだ空想に基づく無知」に変化⁽¹³⁾したと推測出来る。それは言うなれば「幸福なる無知」⁽¹⁴⁾とでも表現出来る狂信主義の萌芽と考えられ、そこから導き出される認識は時に全く独善的になり得ることをも意味している。こうした思考形態は、一種のイデオロギーとして、前述のイスラムに対する「ある種の劣等感」に対する補償行為としてだけでなく、ユダヤ人迫害あるいは魔女狩りといった形を以てヨーロッパの内部へも波及した。

そもそも「十字軍」運動はそれ自体が強い思想性を帯びているが、そこに発生した「十字軍」思想とでも言うべき論理（イデオロギー）は、究極的に現代にまでその影響力を誇示している。すなわち「十字軍」時代に形成された「自己正当化の論理」⁽¹⁵⁾は、大航海時代においては「征服者の論理」⁽¹⁶⁾に、やがてそれは「強者の論理」⁽¹⁷⁾へと転換していったと考えられる。このことは、近代化の名の下に推し進められたヨーロッパ的価値観の輸出が、その起源を「十字軍」時代に求めることが出来ることを意味している。

5. 「十字軍」の教材化

世界史の教科書における「十字軍」の記述は、概して事件史としての側面に偏ってしまい、結果的にその本質について触れることを避けてしまっている観がある。例えば、一般的な解釈としては、「… 170年間に7(8)回の大遠征。…」といったように、「十字軍」の軍事遠征としての性格が前面に押し出されることが多い。しかしながら、「十字軍」を異文化理解のための教材として扱うためにも、けっして上記のような単なる同時代的な歴史事象の把握で終わらせてはいけない。すなわち、「十字軍」時代における諸文明の遭遇という現象は、無知的状況を含む異文化不理解のモデルであるとともに、そこに形成された「十字軍」思想が、現代社会における様々な国際問題の本質に迫りうる可能性を秘めているという点に留意しなければならないであろう。

前述の世界史教育における三項目の課題を念頭に、「十字軍」を題材とする一試案を以下に提示したい。この一連の授業におけるキーワードは、“「十字軍」思想”とした。すなわち、その目標としては、一つ目に「十字軍」思想の形成とその影響について、二つ目に「十字軍」運動が現代社会の状況と深く関連していること、三つ目に「十字軍」時代における異文化接触をモデルに、それぞれ異文化理解について考察することとした。そして、最終的に生徒たちがこの授業を通じて異文化認識・理解について個々に意見を持てることを狙いとした。

第一時：「十字軍」はいかに始められたか。

（加害者の視点でのアプローチ。「十字軍」の意義。「十字軍」思想の発生。）

第二時：「十字軍」とは聖なるものか。

（なぜ「十字軍」は聖戦と呼ばれたか。その矛盾点と「十字軍」思想の本質。）

第三時：「十字軍」思想の影響。

（「十字軍」時代の異文化認識・理解をモデルに異文化理解について考察する。）

この試案は、実際に平成4年11月に研究実践したものであり⁽¹⁸⁾、その際には生徒からのアンケートも収拾した。そこで三時間終了後の生徒たちの異文化理解に関する感想のうちその代表的なものをいくつか紹介しておく。

- ・「個人レベルならできるが国家間では非常に困難だと思う。」（T. M）
- ・「はっきりいって異文化を完全に理解することはできないが、異文化の人々のやっていること（慣習等）を知ることである程度はうまくいくと思う。要は偏見を持たず尊大にならないことだと思う。」
- ・「異文化の人と会うという時、偏見などを捨てるのは難しい事だと思う。まず、各国がそれぞれOPENにしてくれたら、もっと理解しやすいのでは。」
- ・「どうしても欧米人に対して受け身になってしまう傾向がある。文化に優劣はないのだから、個人的にも、お互い影響しあって理解していきたい。」
- ・「私もアメリカに何年か住んでいて異文化理解についてよく考えさせられた。だから今日の授業の最後の部分がよく分かった。」
- ・「他の国の文化を理解するのは本当に難しいと思う。…（略）、理解までするのはやっぱり大変だというような気がします。ちなみにわたしは南アフリカ共和国に3年住んでましたが、まだよくわからない。」

6 結論にかえて…世界史教育におけるヨーロッパ史の扱いについて

世界史教育におけるヨーロッパ史の内容量の絶対的多さは、教師にも生徒にも現実的に負担が大きい。今後の世界史教育の動向を推測する時、ヨーロッパ史の内容は淘汰される方向になるに違いないであろう。あまりにも多すぎる王朝の変遷、政治・経済的事象の複雑性など、政治・経済重視の方向性は改めていかねばならない。

ヨーロッパという文明の歴史を再認識するために、その形成と展開を「十字軍」を中核として学習を進めてはどうであろうか。すなわち、一連の「十字軍」運動期に「ヨーロッパ世界」あるいは「ヨーロッパ文明」が成人に達したとするワットの説⁽¹⁹⁾を元に試みるものである。もっとも、シャルルマーニュの戴冠を以てヨーロッパ世界の成立⁽²⁰⁾とする見解が一般的ではあるが、必ずしもそうは言い切れないであろう。確かに、新しい皇帝権の成立により、初期のキリスト教世界が西と東の双方に正当性を有する二つのキリスト教世界に分裂する最初のステップを踏んだと言うことは出来る。しかし、こと「一つの成熟した世界」としての成熟度においては、彼の事業をそう誇大に論じることは出来ないはずである。なぜなら、彼の帝国の統一性は、彼自信の傑出した才能に負うところが絶対であり、彼の斬新な政策にも拘らず、帝国の各地は以前として文化・言語・社会構造などにおいて大きな隔りがある⁽²¹⁾と考えられるからである。

また「十字軍」思想の発生と展開を重視していくことにより、その延長線上には大航海時代・植民地主義時代・産業革命・帝国主義・世界大戦などの「文明の遭遇現象」を扱うことも可能となる。現代の諸問題を考察するためにも、この流れの中で世界的な絡みを見ていくことは十分に価値有ることであると判断する。さらに、注目したいのは「ヨーロッパ古代史」の扱いである。一般的にヨーロッパの歴史は、ゲルマン民族の移動後の時代から学習が始められており、その時期は全く触れられていないに等しい。すでに我々は、いわゆるヨーロッパ文明がギリシア・ローマとの完全な連続性を有していないことを認識出来るようになった。しかしながら、この文明だけでなく世界の諸文明を対等に認識していくためにも、改めて古代（原）文明の時代から「人間

の生活」に焦点をあてていくことは必要不可欠であると考えられる。“今”を理解しようとするなら“昔”を知ることなしには不可能なことである。なぜなら、時間は流れるのではなく堆積するものだからである。従って、「十字軍」という教材をヨーロッパ史の中核に据えることによって、異文化認識・理解の視点をさらに強調していけるのではなからうか。

註

- (1) 日本で使用される「異文化理解教育」とは、英語の“Intercultural Education”の邦訳であると考えられる。そもそも文化とは、「知識・信仰・芸術・道徳・法律・風習」その他人間がその歴史のなかで獲得したあらゆる能力や習慣からなる複合体の全体と定義できよう。それは、「ある特定の集団もしくは社会が持つ独自の生活様式」であるとともに、最小の単位は「個人」であるとも考えられる。しかしながら、「異文化」とは、通常「異民族文化」のことを指しており、そうした数多くの「異文化」の存在について寛容でなければならない。
- (2) ここで言う「ヨーロッパ」とは、地理上のヨーロッパを指すのではなく、いわゆる西ヨーロッパ及びその文明、そしてそれを主体的に受け入れて発展したと考えられるアメリカ合衆国のことを指す。なお、欧米文明とした場合、それは現代のヨーロッパ文明のこととする。
- (3) 理解を類型化するならば、敵対的理解・闘争的理解そして友好的理解などにわけることが出来る。牧野博彦「「異文化理解」とは何か」（異文化間教育学会編『異文化間教育2・異文化教育と国際理解』）アカデミア出版会、1988年、2月号。
- (4) ここで言う「空間的認識」とは、現代という限られた時限において知ることの出来るある異文化に関する情報のことである。つまり「アブラが無くなってアラブに気が付いた」はずなのに「湾岸戦争が起きてイスラムに気が付いた」ように、本来知っているべき基本的な異文化認識の事項に関して知らない、あるいは興味がないという状況が非常に多いということである。
- (5) A. J. トインビーは「文明の遭遇現象」を重視する必要性や歴史学の中で異文化理解の視点からの研究の価値の重要性を示唆している。A. J. トインビー『歴史の研究・第十七巻』（第九篇・文明の空間における接触～同時代文明の出会い～）「歴史の研究」刊行会、経済往来社、1971年。なお、「文明の遭遇」という用語は、社会思想社、縮刷版『歴史の研究3』第三十一章・同時代文明遭遇の概観）、長谷川松治訳、1981年から引用した。
- (6) これはある意味で歴史研究の現状の反映であるとも言える。「ヨーロッパの歴史を本質から見直す」ことの重要性はすでに述べた通りである。しかしながら、現実には多すぎるヨーロッパ史の記述はいかんともしがたいものがある。それは、授業作りに応用できるような他地域、例えばイスラム社会・文明の研究書の少なさにあると考えることは出来る。歴史教育の立場としては、他地域の歴史研究のより一層の充実を願う（待つ）より他にはないであろう。
- (7) A. J. トインビー、前掲書（経済往来社）、pp. 210-237。「応戦の多様性」の用語は、同著者、前掲書（社会思想社）、第三十二章・同時代文明遭遇の過程（二・応戦の多様性）から引用した。
- (8) 前述の「心性」は具体的に宗教・信仰に表出する。その民族に固有の深層的心理に迫ろうと

する努力はけっして無意味ではないはずである。

- (9) 二谷貞夫『世界史教育の研究』弘生書林、1986年、pp. 84-87. 。
- (10) 地中海世界という概念は、いわゆる古典古代までを指すのではない。ユダヤ教の延長線上に位置するキリスト教・イスラム教という同じく一神教を奉ずる二つの主文明のせめぎ合いが主体的に行なわれたのが地中海世界であったと考える。やがてキリスト教は、歴史的・地理的あるいは宗教的要因からヨーロッパ＝キリスト教社会とビザンツ＝キリスト教社会へと分裂する。両者はまさに似て否なるものであり、そこに至り地中海世界に三つの主文明が鼎立することとなった。ゆえに地中海世界とは、これらの文明の影響下にある地域の総称として使用出来る。
- (11) A. マアルーフ『アラブがみた十字軍』、牟田口義郎・新川雅子訳、リプロポート、1986年、p. 393. 。
- (12) W. M. ワット『地中海世界のイスラム～ヨーロッパとの出会い～』筑摩叢書292、筑摩書房、1984年、p. 142. あるいは三木亘「世界史のなかのイスラム世界」（上岡弘二編、『イスラム世界の人々1・総論』）東洋経済新報社、1984年、pp. 62-63. 。
- (13) R. W. サザーン『ヨーロッパとイスラム文明』岩波現代選書42、鈴木利昭訳、岩波書店、1980年、p. 42. 。
- (14) 堀米庸三『中世の光と影（下）』講談社学術文庫 206、講談社、1978年、p. 35. 他。
- (15) ヨーロッパがイスラム文明などの異文明と遭遇した時、自らの存在を正当化するその論理をキリスト教の教義に求めたということ。そしてキリスト教を奉ずるヨーロッパ文明こそが唯一正義かつ最高の文明であるという認識を以て、劣等感の補償としたと考えられる。
- (16) 石原保憲氏は、大航海時代の「発見＝征服」初期の30年間で“人類史イデオロギー”の造出に大きな意味があるとしている。（石原保憲『インディアスの発見～ラス・カサスを読む』田畑書店、1980年。）彼の言うところの“人類史イデオロギーとは、「自ら属する集団や国家が行なってきた事業に不滅かつ普遍的な価値を賦与しようとするイデオロギー」であり、「それは自らを人類全体の代表的存在と思い込む民族や国家のおごりが生み出したものに他ならない。」ということである。このイデオロギーは、すでに「十字軍」というイデオロギーとして展開され始めていたと考えられる。
- (17) 二谷貞夫氏は「強者の論理」と「進化論」の関連性について論じている。つまり、「強者の論理」＝「生存競争、弱肉強食、自然淘汰、適者生存」という思考である。（二谷貞夫『世界史教育の研究』弘生書林、1988年、pp. 226-237. 。）そもそも「強者の論理」とは「征服者の論理」の延長に存在する思考形態であり、そこに欧米的合理主義との関連性をも内在させている。すなわちそれは、ヨーロッパ文明の有するある種の非寛容性・排他性（合理的排他精神）と結びつくものであると考えられる。
- (18) この実践は、筆者が平成4年当時非常勤講師として勤務していた茗溪学園中高等学校の協力を得て、平成4年11月2・6日の2回に亘り実施したものである。
- (19) 例えば、W. M. ワット（前掲書、pp. 125-145. ）は、ヨーロッパはイスラムと出会うことにより自己を認識した（一つの文明として覚醒した）と論じている。

- ⑳ ヨーロッパ世界の形成において、ビザンツ世界との関連性は重要な要素である。ヨーロッパが自立するためには、ビザンツと精神的に手を切ることが最低限必要であったと考えられる。シャルルマーニュ以後も、部分的な食違いはあるにせよ少なくとも宗教上の感情において分裂状態までにはなかったと考えるべきであろう。その状態が崩れたのは、地中海世界・第三の高等宗教イスラムとの遭遇であり、それは「十字軍」の時代に助長されたと推測出来る。
- ㉑ 佐藤彰一「フランクの分裂とヴァイキング」（『週刊朝日百科・世界の歴史36…9～10世紀の世界』）朝日新聞社、1989年。